

天賦の才ある者は、  
時と場所を選ばず、その力を発揮する。  
しかし、それでもなおいえることは、すべての音楽家にとって  
ウィーンは特別な地である、ということだ。  
至上の名曲が次々と紡がれる街、ウィーン。  
そして、今、ウィーンを聴こう。



ウィーンを聴く。

グランシップ静響コンサートシリーズ

～華麗なる音楽の都～

ウィーン

I 4/20 II 7/9 III 10/29 IV 2004.2/22

Wolfgang Amadeus Mozart (1756 - 1791)  
オーストリア・ザルツブルグの音楽家の家に生まれる。父レオポルドに学び、5才で作曲を試みる。25才からウィーンに住み、作曲家、ピアニストとして人気を博すが、早熟の天才は35才で夭逝。亡骸はウィーン郊外の聖マルクス墓地の共同墓地に埋葬されたが、その正確な場所を知る者はほとんどいない。



神童

モーツァルトのウィーン。

ではなぜ、世界中の音楽的才能は、この街に集まるのか。

それに13世紀後半から20世紀初頭にかけて栄華を極めたハプスブルグ家によるところが大きい。ハプスブルグ家は、代々音楽に造詣が深く、作曲家や演奏家を手厚く保護したことから、いつしかそこは音楽家にとって最高の道が開かれる街となっていたのだ。

とくに18世紀から19世紀にかけてのウィーンには、名だたる天才がこの街を訪れており、ウィーン古典派の三大作曲家と称されるハイドン、ベートーヴェン、モーツァルトは、その代表格。このうちベートーヴェンとモーツァルトは、クラシック音楽ではコンサートなどでの演奏回数、CDの数において他の追隨を許さない、いわば二大巨匠だ。

そんな二人が初めて顔をあわせたのは1787年。モーツァルト31歳、ベートーヴェン17歳の春だ。た。ベートーヴェンは、生まれて初めてのウィーンでモーツァルトを訪ね、ピアノを演奏する。が、敬愛するモーツァルトを格別感心させるまでには至らなかった。そこで主題を与えてもらい即興演奏したところ、さすがのモーツァルトも驚いて、友人に「彼はやがて世間をあつといわせる音楽家になるよ」と語ったという。

それから4年後、モーツァルトは貧困の中で天に召され、ベートーヴェンもやがて聴力を失い、モーツァルトの死から36年後にその生涯を閉じる。二人はウィーンで栄光と苦悩を味わい、ウィーンに没した。さらに彼らに共通していえることは、たとえ死の淵にあつても創作のペンを置くことはなかつたということだ。ウィーンという街がそうさせたのかどうかはわからない。天賦の才ある者は、時と場所を選ばない。しかし、それでも二人にとつてウィーンは特別な街だつたと、残された作品はおしえている。だからこそ、それらを聴きたいと思う。

そして、今、彼らを聴こう。

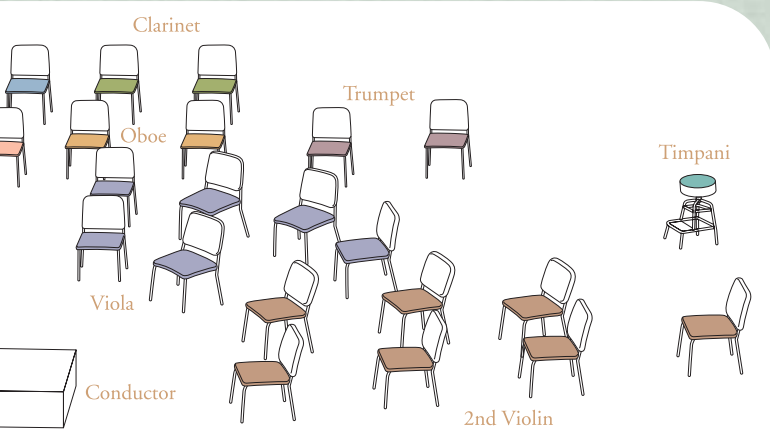
聖樂

ベートーヴェンのウィーン。



ベートーヴェン Ludwig Van Beethoven(1770～1827)  
ドイツのボンに生まれる。父はテノール歌手、祖父も優れた  
バカ歌手で宮廷楽長を務めるほどの音楽一家で、早くから  
音楽教育を受ける。21才からウィーンに移り住み、ピアノス  
トとして活躍する一方、作曲に力を注ぐ。二十代後半より耳  
の病気に冒されながら、57年の生涯を閉じるまで創作を続けた。

# オーケストラ、オーケストラ、オーケストラ。



オーケストラは、もともと宮廷の「食卓の音楽」として存在した宮廷音楽家たちに端を発するもので、18世紀にはこの宮廷オーケストラが最もポピュラーなオーケストラのスタイルとなる。

野球なら9人、サッカーなら11人のチームブレードだが、オーケストラとなれば大所帯。それでもモーツァルトの時代までは、楽器の種類もさほど多くはなかったが、ベートーヴェンが現れ、大交響曲を書くようになってから、楽器も人数もどんどん増えていく。お馴染みのクラリネットも、オーケストラでは新参の楽器なのだ。

そんな多種多様な音色を用いて、作品としてまとめ上げる作曲者は確かに凄い。けれど、これを現実の音楽として立ち上げ、聴かせてくれる指揮者や演奏者もまた素晴らしい。

そして、厚みのある音世界を楽しむなら、やはりオーケストラが一番。個々の持ち味と技量が織りなすアンサンブルには、ソロでは味わえない魅力があふれている。さらにあなたが初心者ならば、オーケストラの演奏の中でもそれぞれの楽器の音色を見つけてみるのも楽しい。この一年、静岡交響楽団は、音楽の楽しみをより深く、多彩におしえてくれるはずだ。

## ウィーンを聴こう。



**①指揮者** Conductor  
オーケストラという楽器を演奏する演奏者であり、ハーモニーの創造者。曲想やテンポ、メロディの歌い方など、すべてを把握・決定する。

**堤俊作** Syunsaku Tsutsumi  
桐朋学園卒。72年東京交響楽団でデビュー。東響・札幌の指揮者を歴任。東京シティフィル・ロイヤルメトロポリタン管弦楽団・静響を創設指導。海外でも78年ジュネーヴ国際音楽コンクール指揮者部門優勝ほか、ロンドン交響楽団等に客演。現在は静響音楽監督、ロイヤルチェンバーオーケストラ音楽監督。

**⑨オーボエ** Oboe  
木管の中のコンサートマスター的存在。演奏前のチューニングの際、最初に音を出すのがオーボエ。ソロで有名な曲といえば『白鳥の湖』。

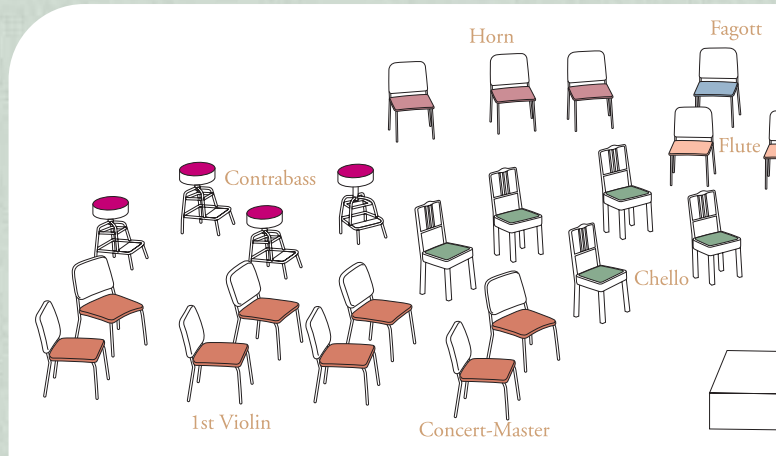


**⑫トランペット** Trumpet  
ファンファーレから、透明感のある旋律、リズム打ちなど、守備範囲の広い金管楽器。マウスピースに唇をあて、振動させて音を出す。

**⑭ティンパニー** Timpani  
やわらかな音、荘厳な音、力強い音でオーケストラを引き締める。ベートーヴェン『第九』はこの楽器が初めてソロで登場した曲。

**⑤ヴィオラ** Viola  
弦の中で内声部を受け持つヴィオラは、艶やかな高音、輝きのある中音、豊かな低音が魅力。他の弦や管楽器とのバランスを調整する役目も。

**④2nd ヴァイオリン** 2nd Violin  
音に厚みを加え、リズムをひきたてながら、第1ヴァイオリンや曲の土台をつくる。普通、第1ヴァイオリンよりも1~2名少ない。



# 静岡交響楽団で

**⑪ファゴット** Fagott  
4つの木管楽器の中で中低音を奏で、厚みと深みを加える。ほかの楽器とも相性がよく、さまざまな楽器の音をまとめる役割も。

**⑦コントラバス** Contrabass  
ヴァイオリンがお母さん、チェロがお父さんなら、コントラバスはお爺さん。弦楽器の一番下の音をつくり、オケの響きに重厚感を加える。



**⑬ホルン** Horn  
長い管をぐるぐる巻いた形でおなじみ。音量や音色を自在に調節しながら、ときにやわらかに、ときに高らかに壮大な響きを奏でる。

**⑧フルート** Flute  
宮廷で愛用された楽器だけに、その音色はやわらかで優雅。ベートーヴェンの『田園』や交響曲『第7番』でその美しいソロが聴ける。

**⑥チェロ** Chello  
中低音の支えであり、コントラバスと共にオーケストラ全体の音を支える。ベートーヴェンの『運命』第2楽章などでソロが聴ける。

**⑩クラリネット** Clarinet  
柔らかな音色と幅広い音域が特徴で、ジャズやポピュラーなど幅広いジャンルで活躍。モーツァルトの『クラリネット協奏曲』は必聴。

## 静岡交響楽団

Shizuoka Symphony Orchestra  
'88年結成の「静岡室内管弦楽団カベレ・シズオカ」を前身とする楽団で、静岡県内在住、あるいは県出身者で東京を中心に活躍するプロの演奏家で構成。古典派からロマン派までの交響曲・協奏曲の演奏を中心に活動している。



**③1st ヴァイオリン** 1st Violin  
ヴァイオリンは歌う楽器といわれ、第1ヴァイオリンはオーケストラで最も多くの人数が配され、主にメロディを奏でる。

**②コンサートマスター** Concertmaster  
第1ヴァイオリンの最前列に座り、指揮者に代わって全体をリードし、さらに拍手や退場のタイミングなどステージマナーの指示も行う。

ソリストで聴きたい。

シリーズで聴きたい。

グランシップにおける静岡交響楽団のコンサートシリーズは、2年目を迎えた。昨年は1年目ということもあって、親しみやすい作品をチョイス。バラエティに富んだプログラムで人々の耳を楽しませた。

そして、今年。左ページを参照いただければわかると思うが、その趣は1年目とはずいぶん違うものになっている。

まず、モーツァルトとベートーヴェンという、楽都ウィーンで活躍した二人の大作曲家が4回にわたってフィーチャーされていること。そして、毎回プログラムの2曲目に国内外を代表するソリストを迎え、それぞれに合わせた協奏曲が楽しめること。さらに特筆すべきは、ベートーヴェンの交響曲を第3番、第5番、第6番、第7番と順に、それも全楽章フルに聴けること。以上が本シリーズの特徴である。

ベートーヴェンの交響曲、とくに今回のラインナップは、あまりにも有名な曲ばかり。とはいつもの、たとえば『ジャジャジャジャーン』で始まる第5番『運命』の冒頭を知ってはいても後は知らない、考えてみれば最後まで聴いたことがない、という人も少なくないのではないだろうか。そして、そんな人にこそ、このシリーズはおすすりである。

やや専門的な話になるが、ベートーヴェンの交響曲は、イギリスの音楽学者が20世紀末に校訂・出版した「ベレンライター版」の楽譜

を使用するのが近年流行っている。が、本シリーズ第1回『英雄』では、それをあえて使わず、ブライトコフ新版を使用した。それについて指揮者である堤俊作氏はこう語っている。

「料理にたとえるなら、楽譜はあくまでも食材に過ぎません。むしろこの食材を使って、

## グランシップ 静響コンサート、ウィーンシリーズ

いかに料理するかが私たち演奏家の本来の役割なのです。古い音楽の都ウィーンで生まれた19世紀の音楽を、静響という若いオーケストラが21世紀にどう再現するか。そのあたりをぜひ、お楽しみいただきたいと思いますね」

もちろんソリストによる演奏も、実に楽しみなところ。そして、気軽なプライス設定もまた魅力的であることはいまでもない。

スタッフから一言。

静岡県文化財団  
グランシップ静響コンサート担当  
池谷恵理子

クラシックの基本を  
よりおトクな料金で。

「ウィーンは古くからの音楽の都であり、現代の演奏家にとっても原点に還る場所。そうした意味からも奇をてらった企画ではなく、クラシックを基本のカたちでお楽しみいただきたいと企画しました。このラインナップ、このゲストで、このプライスは本当におトクだと思いますので、日頃クラシックに馴染みのない方にもぜひ気軽に出席いただきたいと思いますね」



# グランシップ静響コンサートシリーズ ～華麗なる音楽の都ウィーン～

## 全曲解説

全席指定 S席3,000円 A席2,000円〈税込〉

M モーツァルト B ベートーヴェン

**4/20** **終了**  
PM1:30開場  
PM2:00開演  
中ホール・大地

### B プロメテウスの創造物序曲

序曲と16の小品からなるバレエ音楽で、現在、序曲を除いてほとんど演奏されることはない。この日の3曲目『英雄』第4楽章の主題は、本作品からとったもの。

### M フルート協奏曲第2番 ニ長調K.314

フルートがあまり好きではなかったモーツァルトが富豪の依頼で書いた曲で、約束に間に合わせるため、オーボエ変奏曲を編曲。フルート協奏曲を代表する傑作。

**7/9** **チケット発売中**  
PM6:30開場  
PM7:00開演  
中ホール・大地

### M 魔笛序曲

『魔笛』はモーツァルト歌劇の最終作で、最も優れた作品といわれる。序曲は、ゆったりとした導入部を持つソナタ形式。オペラに出てくる音が象徴的に使われている。

### M クラリネット協奏曲 イ長調K.622

クラリネットの名手シュタットラーに書いた名曲。死の2カ月前に作曲したもので、第二楽章の淡々とした旋律は、まるで死を予感した彼の心情そのもののよう。

**10/29** **7/6出チケット発売**  
PM6:30開場  
PM7:00開演  
中ホール・大地

### M ドン・ジョヴァンニ序曲

シリアスな序奏部と明るく楽しい主部からなる序曲。台本ができあがる前から作曲され、最後に残ったこの序曲は、初演の前の晩に4時間程で書き上げられたという。

### M ヴァイオリン協奏曲 第5番イ長調K.219

「トルコ風」と呼ばれるように、第三楽章には当時流行のトルコ風の活発なリズムやメロディが使われている。また、小編成ながら管楽器を重用した、新鮮な一曲。

**2004  
2/22** **12/7日チケット発売**  
PM1:30開場  
PM2:00開演  
中ホール・大地

### B コリオラン序曲

ベートーヴェンは人生で11の序曲を作曲。その中で最も広く親しまれている一曲。古代ローマの英雄コリオランの悲劇『コリオラン』に共感して作曲したという。

### B ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調OP.73「皇帝」

『皇帝』という呼び名は作曲者によるものではないが、彼の協奏曲の中でとくに男性的で絢爛豪華な大曲。後のワーグナーにも多大な影響を与えた一曲といわれる。

#### ゲスト

#### 石原利矩 (フルート)



国立音大卒業後、N響入団。その後、ウィーン国立音楽アカデミーにてワウゼック、レズニチェック両教授、アンドレ・ジョネ氏に師事。帰国後、リサイタル等で活躍。フリードリヒ・クーラの作品研究でも知られる。

#### ゲスト

#### 横川晴児 (クラリネット)



'68年渡仏。ルーアン音楽院、パリ国立高等音楽院を共に1等賞で卒業。帰国後N響首席奏者就任、ソリストとしても国内各地で活躍。'88年第2回グローバル音楽奨励賞受賞。トゥロン国際コンクール等の審査員も務める。

#### ゲスト

#### 堀 正文 (ヴァイオリン)



独フライブルク国立音楽大学在学中よりハイデルベルク室内合奏団のソリストとして活躍。フランクフルト放送管弦楽団との共演は全ドイツで放送、絶賛される。'79年N響コンサートマスターとして入団。数々の世界的音楽家と共演。

#### ゲスト

#### イェルク・デーモス (ピアノ)



ドイツ・ロマン派の最後を飾るウィーンの巨匠。14歳でウィーン楽友協会コンサートでデビュー。'47年同協会栄誉賞授与。'56年ブゾーニ国際コンクール1位により国際的名声を獲得。カラヤンほか多くの巨匠と共演している。

### B 交響曲第3番「英雄」

英雄とはナポレオンのこと。当初、表題は「ボナパルト」だったが、ナポレオンの皇帝即位に裏切りを感じ、それをかき消したという逸話は有名。壮大にして長大、難易な本作は、西洋音楽史における革命的作品であり、交響曲が概ね30分だった当時、1時間近くの演奏に聴衆が悲鳴をあげたという。第2楽章が葬送行進曲であるのも独創的。

### B 交響曲第5番「運命」

聴覚を冒された作者がその過酷な運命に挑む姿に重なる、不滅の傑作。有名な冒頭「ジャジャジャジャーン」について、「運命はこのように扉を叩く」と弟子に語ったことから『運命』と呼ばれるが、本人が名づけたものではない。その冒頭から歓喜に満ちた終楽章まで、「暗黒から光明へ」というテーマが見事なまでに貫かれている。

### B 交響曲第6番「田園」

散歩が好きなベートーヴェンが、ウィーン郊外のハイリゲンシュタットの森を散策しながら約1年のハイペースで書いたもの。彼の交響曲で5つの楽章からなるもの、さらに各楽章に表題がつけられているのは本作品のみ。第2楽章では小鳥のさえずりが、第3楽章では村の楽隊の音楽が聴けるなど、具体的な描写の多い作品である。

### B 交響曲第7番

後にリストが「リズムの神化」、ワーグナーは「舞踏の神化」と評したように、第7番の特徴は生命力に溢れたリズム。本来はゆっくりな第2楽章までがアレグレットとやや速めに指示されるなど、当時としてはリズム重用の型破りな交響曲だった。ちなみに第2楽章は「不滅のアレグレット」と呼ばれ、昔はアンコールに度々登場した。

■ロビーコンサート／開場時間より開演までの間、会場の中ホール・大地2階ホワイエにて、静響メンバーによりロビーコンサートを行います。開演前のひとときをお楽しみください。

■2部だけチケット／開演時間に間に合わない!という方、休憩後の2部からご入場いただけます。当日の開演後より発売し、各席半額にてお聴きいただけます。前売・当日券で完売の場合は発売いたしません。

# Cray Animation



The Aardman

## 粘土だから変形自在! 表現多彩! キャラクターが生きてくる!

**ク**レイ(粘土)アニメーションとは、ストップモーションアニメの手法の一つで、人形を少しずつ動かしては、一コマずつ撮影していくアニメのこと。欧米では、人形アニメを総じてこう呼んだりもする。

そもそもはポーランド生まれのヴァディスワフ・スターレヴィチが編み出した手法で、昆虫人形による彼の作品が幾つかあるものの、当初、人形の素材は粘土ではなかった。

やがて変型が容易であることから粘土が用いられるようになり、その最初の作品といわれるのが、1950年代アメリカのテレビ番組で人気を博した『ガンビー』である。『クロード・マンディ』(1974)



では、ついにアカデミー賞を獲得し、このあたりからクレイ・アニメ人気は世界的に高まり、スイスのオットマー・グットマンによる『ピングー』など人気キャラクターが登場。日本でも『ニャッキ』の伊藤有彦など、アーティストも続々と姿を現しはじめる。

そして、今、最も知られるクレイアニメの発信地といえば、イギリスのアードマンスタジオだろう。『ウォレスとグルミット』『チキンラン』などの作品はいずれも大ヒット。CGでは創りだせない味のあるキャラクターと最高の技術は、常に世界の注目の的だ。

What's Cray Animation?  
クレイ・アニメーションって、なんだ?

丸一日費やして、撮影できる

映像はたった3秒分。

アーティストの「手」がつくる、  
驚異の世界。

デジタルは、まるで魔法のようだ。空想の世界も、あたかもそこにあるかのごとく見せることができる。情報はいつでも目の前の画面に取り出され、手紙は「メール」という呼び名で瞬時に相手に届けられる。けれど、もはやそれらは驚きではない。昔、「異常も日々続くと日常になる」という広告コピーがあったが、ここまでデジタル化が進むと、メールよりも不意に届く封書の手紙のほうが新鮮な何かを感じることは事実だ。

そして、そんな新鮮な驚きがクレイアニメーションの世界にはある。

高速化を讃美する現代にあつて、その撮影は丸一日をかけてもわずか3秒分。もちろんCGを使えば、人形に動きを加えるなどあつという間。にもかかわらず、人形をほんの少し動かしては1コマずつ撮影していくという、気の遠くなる作業を繰り返していく。デジタルはあくまでも二次的なものであり、だからこそ、それは「人間の手から生まれる」ものだけが放つぬくもりに満ちているのだらう。

そんなクレイアニメーションの世界を、グランシップで、この夏のぞいてみたいと思う。あの映画はどのように作られたのか。あのCMの裏側はどうなっているのか。その驚きと感動の世界を知り、そして、あらためて感じたい。人間がいかに感性豊かで、クリエイティブな生き物であるか、ということ。

驚きと感動の

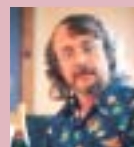
# のぞいてごらん! 粘土 クレイ・アニメの世界を。

The Aardman

スタジオを創設したのは、  
16歳の二人の少年だった。



Nick Park  
ニック・パーク  
『ウォレスとグルミット』の監督。  
アカデミー賞3作連続受賞。



Peter Lord  
ピーター・ロード  
設立者でカメラマン。  
『チキンラン』では共同  
監督を務めた。



David Sproxton  
ディビッド・スプロクストン  
設立者でカメラマン。現在は、  
社長としてマネジメントに大忙し。

★アードマンアニメーションズは、映画好きの16歳の少年、ディビッド・スプロクストンとピーター・ロードの二人によって、1972年に設立された。当初は普通のセル画スタジオだったが、1982年の『Conversation Pieces』（会話の断片）から、クレイアニメに転身。この作品における斬新な視点と音に忠実な映像づくり、とりわけ後にお家芸として確立される“リップシンク”（発音と口の動きを合わせる）の手法では大きく評価され、アードマンは一気に注目されるようになる。

その後、若いクリエイターを育成し、次々と作品を発表。なかでも頭角をあらわしたのがニック・パークで、1989年、彼が監

督した『快適な生活』がアカデミー賞短編アニメーション部門で受賞。続く『ウォレスとグルミット』シリーズの3作品で再び彼はオスカーを手にしたのである。

成功をおさめたアードマンは、続いてスティーブン・スピルバーグ率いるドリームワークスと組み、初の長篇アニメーション映画『チキンラン』の制作に挑戦。ここでも大ヒットをおさめ、アードマンの名は揺るぎないものとなった。

What's Aardman?  
アードマンスタジオって、知ってる?

「ウォレスとグルミット」の

# アードマンスタジオ展

7/25(金)ー8/3(日) 午前11時～午後7時(入場は6時30分まで)

## プロローグ ZONE

スタジオの歴史をはじめ、設立者ピーターとディビッド、アカデミー賞受賞監督ニックのメッセージ、17名のクリエイターを一挙紹介。貴重な映像もいっぱい。



★メイン会場 6階展示ギャラリー

★ワークショップ・グッズショップ 6階交流ホール

★映画上映 2階映像ホール

★入場料 税込 一般・大学生 前売500円(当日800円)  
中学・高校生 前売300円(当日600円)

★映画券 税込 500円(当日のみ)\*小学生以下無料  
展覧会の入場券をお持ちの方は300円


期間中、前売券・当日券をお持ちの方、毎日先着100名に缶バッジ(非売品)プレゼント!

The Aardman

## 発明家とその飼い犬。 トボけたコンビが大活躍!?

★タイトルロールにあるウォレスとは発明家のおじさん、グルミットはその飼い犬。グルミットはオス犬のくせに編み物をしたりと芸がこまかいせいか、あるいはイギリス・モダンなコメディー仕立てのせいか、その関係は主従関係というより、長年連れ添った夫婦のような感じすらある。

グリコのプッチンプリンや住友生命のCMにも登場している彼らだが、その活躍ぶり(?)は、シリーズ三部作『チーズホリデー A Grand day out』『ペンギンに気をつける! The Wrong trousers』『危機一髪! A Close Shave』でぜひともチェックを。

イギリスものならではのウィット、渋い色合いは、むしろ大人向き。グルミットが愛読書がドッグトエフスキーの『罪と罰』だったり、すみずみに利いたシャレもお見逃しなく。



Wallace ウォレス

誕生日: 8月7日  
好物: チーズ、紅茶、特別な日のボルドーの赤ワイン  
特技: 発明...といっても成功ばかりじゃないけど  
性格: 心はやさしく、かなり楽道家



Gromit グルミット

誕生日: 2月12日  
好物: コーンフレーク、ウォレスと飲む紅茶  
特技: 編物、機械の取り扱い、字が読める!  
性格: 感受性豊かで頭がいい。



Shaun ショーン

好物: 何でも食べる大食漢  
特技: 決死のアクロバット



Feathers McGraw  
"フェザーズ" マッグロウ

好物: 魚、とにかく魚!  
特技: 変装と悪事にかけては右に出る者なし!



Wendolene ウェンドレン

職業: 毛糸屋の女主人。お父さんは発明家だった。  
性格: 優しい声で会話も弾むけれど...彼女は何か?



Preston プレストン

職業: サイバードック  
特技: トラックの運転、機械の制作

What's 'Wallace &amp; Gromit'?

'ウォレス&amp;グルミット'って、何者?

速やかな決断で、タイムリーな報道写真を。

小川 潤子(マクナム・フォト)

「只トモ」も本作品展「開催に際して来館」

イベントとしての写真展はデパート関連の会場が多いのですが、こつとして公立の施設でできるということは嬉しい驚きでもあります。行政が関わる施設にしては、動いてくださる、という印象です。書類が多いのはいいかにも、ですけれどね(笑)キャバの写真で私がいつも思うのは、当時は報道目的で撮られていたわけです。

ら、それは生々しい写真ではあるけれども、ある程度年月が経つと美術館で飾ってもらえるものになる。これが文化なのかな。美しいものは、文化ではなく、日常の中にあることが後々までタイムレスに残る、文化ってそういうものじゃないかと思うんです。先のイラク報道では、初めて戦争の実況中継がテレビでされましたね。でも、やっていたことはキャバの時代と変

わらない。逆に技術が高度になっているが故に、情報操作がやりやすくなると真実が見えにくい、ということはありますね。写真が一枚あれば、文章も何が必要だなと非常に感じました。そして、今後、グランシップに期待することは、これまで通り、速やかな決断でタイムリーな報道写真を展覧していただく、ということですね。

## アードマンスタジオ探訪 ZONE

アードマンスタジオから生み出される、クレイアニメの驚異の世界と、その裏側を再現セットや映像を使って大公開。あのブッチンプリンのCMセットも登場!



## ギャラリー ZONE

アカデミー賞受賞の『快適な生活』『ウォレスとグルミット』やTV-CMなど、代表作の映像はもちろん、住友生命のCMセットをはじめ、撮影セット10シーン、モデル約60体が一堂に。オリジナル絵コンテも必見。



## アードマン サーカス ZONE

セリフの発音と口のカタチを合わせるアードマン社オリジナル「リップシンクマウス」がお目見え。さらにエミー賞やアカデミー賞ゆかりの品々も!



## クレイ・ワークショップ(交流ホール)

クレイ(粘土)を使って、グルミットづくりに挑戦しよう!  
参加費000円

AM11:30 ~ PM1:00 ~  
PM2:30 ~ PM4:00 ~  
連日一日4回開催・当日申込制



## アードマン・シネマ(映像ホール)

代表作品『ウォレスとグルミット』3部作と劇場大ヒット作品『チキンラン』を上映。(入替制)



|   |            |           |
|---|------------|-----------|
| 1 | チキンラン      | AM11:30 ~ |
| 2 | ウォレスとグルミット | PM 2:00 ~ |
| 3 | チキンラン      | PM 4:30 ~ |
| 4 | ウォレスとグルミット | PM 7:00 ~ |

## アードマンショップ(交流ホール)

『ウォレスとグルミット』グッズの全アイテムをはじめ、『レックス・ザ・ラント』グッズなど、新作から限定モノまで、1000種類以上が勢ぞろい!



# 谷川 賢作

## 幸せのピアノ。

「ピアノは、ソロで二つの世界をつくることができる。音楽の三要素すべてを一度に表現することができますから。だから、一旦ピアノの世界に入ったら、そこから出たくない。よく言うんだけど、一日ピアノを弾いて過ごせたら、どんなに幸せかなあと思うんだよね」

詩がひらく音楽。映像がひらく音楽。

氏は、音楽という世界の扉を開ける鍵をいくつも持っている。「音楽だけでなく、表現とはすべて瞬間のもの」と語る氏は、その時々、一つの鍵を選び出し、あるときは文学の扉から、またあるときは映像の世界から、瞬間の音の宇宙をひらいていく。そんな氏が「ある意味で実験」とした今秋のグランシップ・ジャズライブは、なるほど実にユニークな顔ぶれ。また一つ新たな鍵を得た氏が、静岡でどんな世界をひらいてくれるのか。今からもう楽しみでならない。

□ 谷川さんといいますと、グランシップにはすでに昨年『連詩の会』発表会の折、ピアノで

「ご登場いただいています、あのときはいかがでしたか。」

「あれはもう、トクしちゃったなという感じですね。やっぱり音楽の表現って強いじゃないですか。父親（谷川俊太郎氏）が詩人なので連詩に参加なさった方とはおつきあいもあるのですが、文学のイベントに一人だけ音楽の人間がこのこやって来て、トンビが油揚げさらうようにおいしいところをもっていってしまっただけ（笑）」

「会場にいらした方こそ、詩だけでなく音楽まで聴けて、トクしちゃったな」という感じでしたが。

「率直に言って、音楽のほうが入りやすいということはありませんね。しかし、あれは結構悩みました。詩から触発されるものがあるとはいっても、文学から音楽への移項というのは難しい。ジャズのフィードの人間の場合、即興でなんでもできてしまうじゃないですか。でも、そういう利便的なことじゃなくて、文学と向きあつて曲を作りたいと思つた。だから、発表二日前の夜に静岡に入つて、プランを練る時間が丸一日あったのがすごくよかったんだと思います」

「詩と音楽とのコラボレーションという意味では、これまでもお父さまとアルバムをリリースされたり、ご自身でもDivaというユニットで活動されていらっしゃいますが、詩によつて音楽の世界をひろくとき、そこに特別な作業、手法はあるのでしょうか。」

「わかりやすくいうと、二つ、柱があるんですね。一つは歌を書くということ。詩にメロディをのせて歌にするという作業です

ね。現代詩というのは、そもそも歌になることを前提としているわけじゃないから、五行目を前に持つてきたり、繰り返したりという、大変だけど楽しい作業があるわけですね。一方、今、父親と一緒に朗読と音楽のCDを出していて、これは実験でもあるんですけれど、朗読の時間と音楽の時間を分けている。音楽は詩とともにあり、なおかつ一緒に生きたいわけですよ。BGMにはしたくないですね」

「そのお父さまとの関係も含めて、ご家庭の環境はいかがだったのでしょうか。」

「音楽は、両親揃つて好きでした。ただ、クラシックが多かったかな。あとはジャズとかビートルズとかね。演歌や歌謡曲という日本の音楽はあまりかかつていなかった。小学校三、四年ぐらいになると、父親のレコードラックから面白そうなものを選んで聴きはじめるんですけど、ベートーヴェン、モーツァルト、バッハといったところが好きだったかな。それもオーケストラ。セロニアス・モンクとかJazzとかのレコードもありましたが、僕としてはクラシックのほうがいい気がした。なんといってもフォー・マット



父・谷川俊太郎氏とは、朗読と音楽のCD『クレーの天使』（2002年）『kiss』（2003年）をリリース。ライブ活動も行っている。「父親との共演は、最初は恥ずかしかったですね。でも、最近は慣れて、楽しくやっています」

やメロディがはつきりしていますからね」

「では、オーケストレーションのような本格的な曲づくりは、早くからなさっていたのですか。」

「いやいや、僕は、オーケストレーションについては、コンプレックスの塊なんです。芸大に行つてないし、師匠についたこともない。ただ、『鹿鳴館』で映画音楽の話が来て、やるしかなかった。以来、いまだに参考書片手に試行錯誤です」

「よ。なかでも大ゴトになつてしまったのは、『竹取物語』ですね。あれは最初エンニオ・モリコーネがやる予定だった。でも、モリコーネさんが断つちゃつた。で、急に、急

きよ日本の大御所の名前が何人か挙がつたらしいんだけど、当の市川崑監督が「賢作君にやらせてみればいいんじゃないの？」と気軽に言つたわけ。そして、僕に言うんですよ。『賢作君よ、今度は予算もあるし、フルオーケストラでサントリーホールだ。どうや？』って。だから、僕はジャズ系出身で、オーケストレーションも勉強してないし、できません」とお断りしたんだけど、結局「じゃあ、誰か、つければいいやん」とみたいなことになつてね。山本純之介さんというオーケストレーションをバリバリに書ける人に手伝ってもらつて、なんとかやっただけですけどね。あれはもう、本当に大変でした」

「監督には二つのタイプがありますね。一つは、監督がすごく音楽が好きで、自分の作品に対してこういう音楽をつけたいたいという明確なビジョンをもつてする場合。もう一つは、音楽家に丸投げ。『おまかせします、私は音楽のことは一切分かりません』というタイプ。で、どちらの監督と仕事をするのが好きかというと、やっぱり前者なんです。最近、『竜馬の妻とその夫と愛人』で、もう一人の市川（準）監督と一緒なんです。お互いの考えていることがよく理解しあえた。だから、いい仕事ができたと感じています。あの映画は長さのわりに曲数が少ないんですけど、すべて僕が思つた通りに使つていただいているんです。で、僕が長く一緒にしている監督のほうはどうかというと、まず台詞、二番目に効果音が来るんですね。音楽は底の底のほうで潜在意識に訴えるものでなくてはいかん、みたいな強い持論が監督にはある。だから、当初、僕はびっくりすることばかりだったんです。全部、引き算だから。それでミュージック・エフェクトだか何だかわからない音ばかり並べるんですよ。でも、絵と合わせると、市川崑の手法として生きてくる、というのは確かにある。一種のカルチャーショックでした。」

「ライブでは空っぽになる。別の者が弾いているという感じかな」と語る氏の3枚目のピアノ・ソロ・アルバムが今秋リリースされる。「vol.2では早く空っぽにならねばという意識が少し強すぎたかな。だから、vol.3はもっともっと力をぬいてやろうと思っています。」



【たにかわけんさく】

ジャズ・ピアニスト、作・編曲家。アン・スクール・オブ・コンテンツ・ミュージックにてピアノ及び音楽理論を学ぶ。弘勢憲二、佐藤允彦に師事。在学中からさまざまなセッション参加の傍ら、ラジオドラマ、舞台音楽の作・編曲で活躍。'86年市川崑監督作品『鹿鳴館』以来、市川全作品で音楽を担当のほか、映画『竜馬の妻とその夫と愛人』やNHK『その時歴史が動いた』テーマ音楽等を手がける。'96年現代詩を歌うバンドDivaを結成。。'99年には自身のレーベル、トゥルバドルカフェを創設し、現在までに自己のピアノソロ2枚を含む9枚をリリース。また父・谷川俊太郎と共に朗読と音楽のCD『クレーの天使』『kiss』を発表。'95・'97年日本アカデミー賞優秀音楽賞、'95年第40回アジア太平洋映画祭最優秀音楽賞受賞。'60年東京都生まれ。

## 無意識の経験がつくる音。

□ 谷川さんは、作曲家・編曲家であると同時に、ピアニストというパフォーマーでいらつしゃるわけですが、ピアノという楽器の面白さは、どこにあるとお考えですか。

「うーん、ピアノの面白さは、ソロで一つの世界をつくることができるということかな。もちろん他の楽器ではそれができない、ということではないんですけどね。たとえばヴァイオリンでソロといたら、基本的には旋律を弾くわけで、そこにあるハーモニーというのは聴いている人の感性の中にあるわけでしょう。ところがピアノは三要素（メロディ、リズム、ハーモニー）すべてを一度に表現することができずからね。だから、一旦その世界に入ったら、そこから出たくない。よく言うんだけど、一日ピアノを弾いて過ごせたら、どんなに幸せかなあと思うんだよね」

□ その言葉は、ご自身が責任編集というカタチで参加された『ピアノへ』においても記されていますが、あの本は、ピアニストの方々のお話がたくさん集められていて面白いですね。

「あの中でパネ君（フエビアン・レザ・パネ）が言っていたことは、すごくよくわかるんだよね。自分が気持ちいいと思う時間をどれだけ過ごしてきたか。それがピアノに表れる」という言葉。それ、すごくわかるなあ。自分が無意識のうちに得てきた総体としての経験が全部音に表れてしまう、みたいなことは確かにあるんですね」

□ 十月には、グランシップで谷川さんのライヴが楽しめるとお聞きしています。顔をぶれを見ると、とても魅力的ですね。

「ハーモニカの続木（力）さんとはずっと一緒にやっていて、まあ、漫才でいえば、相方ですね。さが（ゆき）さんも結構一緒にやってますから、この三人はもう、阿吽でできる場所です。ところでさがさんという人のヴォカリーズ（歌詞を持たない母音唱）、これが凄いですよ。本当に彼女の声は楽器なんです。ハナモケラ語というか、宇宙語というか、言葉ならぬ言葉で歌うんですけれど。刑務所に慰問に行ったら、刑務所中が暴動寸前になった、みたいな。それぐらい凄い。で、ベースは吉野（弘志）さんですね。ベーシストというのは、サッカーでいうところの司令塔ですから、彼には中軸にどっしり座っていたでくわけです。そして、このライヴにおける面白い試みとしては、「タトパニ」というエスニックとジャズが渾然一体となったバンドで活躍する二人の参加ですね。アンディ（ベヴァン）とクリス（ハーディ）。アンディは、オーストラリアのアボリジニーが使うディジュリドゥという長い筒状の楽器があるでしょう、あれの名手なんです。今でこそ、ディジュリドゥもオーストラリア原住民の楽器としての認識はありますけれど、複雑な倍音と呪術的な音色が陶酔的。さらにクリスも中近東の打楽器の名手なんです。だから、国籍不明の不思議な雰囲気になると思う。そのステージだけで起きる、利那的なことをやってみてくださいね」

G



チケット発売中 **10/16** 木  
**谷川 賢作** スペシャルユニット  
 Blues & Ethnic Jazz

PM6:00開場 PM7:00開演

グランシップ 6階展示ギャラリー

全席指定 4,000円 1ドリンク付・税込

【出演】谷川賢作(ピアノ)、さがゆき(ヴォイス)、続木力(ハーモニカ)、  
 吉野弘志(ベース)、クリストファー・ハーディ(パーカッション)、  
 アンディ・ベヴァン(サクソ、フルート、ディジュリドゥ)